

『LGBT とキリスト教 20人のストーリー』監修者としての表明

『LGBT とキリスト教 20人のストーリー』が出版されたとき、実は二つの不安がありました。一つは LGBT に批判的な人たちからの攻撃。もう一つは逆に LGBT に肯定的な人たちによる「LGBT を理解した」という思い違いの危険性。どちらかという、前者については覚悟ができていましたし、むしろ後者の問題が大きいと危惧していました。しかし『福音と社会』に載った書評を読んだとき、前者の暴力性を改めて感じ、その衝撃にしばらく呆然となりました。

正直なところ、「本当にこの本をちゃんと読んだのだろうか（読んでいないのではないだろうか）」とを感じる書評でした。LGBT 批判の持論がもともとあって、その持論を正当化するために都合のいい材料をこの本から探そうとしたのではないか、あるいは LGBT 批判を展開する場として「書評欄」を利用しただけだったのではないかとすら感じる内容でした。そもそも本に出てくる 20 人（実際はコラムに登場している人もいるので 40 人以上）は言うまでもなくそれぞれ異なる生い立ちがあり、異なるセクシュアリティを持ち、そして信仰も異なります。そのことを伝えるために出版した本でした。にもかかわらず、書評では「LGBT（特にトランスジェンダー）はこういうものだ」という括りと決めつけがあまりにも甚だしく、「一人ひとりの人間を全く見ていない」という乱暴な内容だったのです。

さらに問題なのは、その書評をそのまま『福音と社会』に載せた編集部です。複数回に分けて掲載されるというこの書評に対し、掲載は問題であると感じた教団出版局が「これは差別でしかないから、これ以上掲載しないでほしい」と伝えたところ、「様々な意見があってもいいのだからこのまま掲載を続ける。書評への反論があるならそれも載せる」という内容の応答が戻ってきました。「抑圧されながらも命がけで生きようとする人たちの声を持論で踏みにじる『書評』を「様々な意見の一つである」と矮小化し、「それは差別なのだから今すぐやめてほしい」という声をすら「様々な意見の一つ」として対等なものであるかのように扱おうとしたその判断は、一見ニュートラルな立場を貫いているように見えるかもしれませんが、実は差別の温存を計ったことになるのです。当然のことながら、発行人の責任も問われるべきです。

今回の出来事を通して、「差別は表現の自由ではない」「それが差別であるかどうかを両者に議論させてジャッジしようとするのは、差別を再生産し、温存する側に立つということである」ということを私自身、あらためて気づかされました。私自身が、そのようなことをしてきてはいなかったか、ということ顧みる大きな機会になったのは事実です。けれど同時に、そこで起こった差別に対して、「それはおかしい」と声をあげる者であらねばならないということを感じるのです。

今回の『福音と社会』の書評による差別事件は、『LGBTとキリスト教 20人のストーリー』に関わった全ての人を大きく傷つけました。そのことを本の監修者として深くお詫びすると同時に、二度とこのようなことが起きないように、起こさせないように、心して差別に向き合っていきたいと思います。

2023年10月24日

監修者

平良愛香